

1. ヨハネが捕えられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。(4:12)

- a. イエスはバプテスマを受けられた後、悪魔の試みを受けるため荒野で40日を過ごされ勝利されました。最強の敵、最大の誘惑に打ち勝ちこれで一安心、と思いきや物事はそう簡単にはいきませんでした。従兄のヨハネが捕えられ牢に入れられたのです。
- b. イエスの平安は外的環境から来るものではありません。もし外から来るものならひとときも平安を感じられることはないでしょう。むしろイエスの平安というのはみ言葉が教える、人知をはるかに超えた神の平安です。
- c. イエスには平安があるからといって感情をお持ちでないということではありません。ヨハネが捕えられた時、またその後打ち首になった時、イエスは従兄の状況を嘆くためしばらくの間一人になられました。時として私たちは本当の愛というのは泣く者とともに泣き喜ぶ者とともに喜ぶことだということを忘れがちになります。イエスはヨハネに「神はあなたにすばらしい計画をお持ちなのだから信じなさい」とはおっしゃいませんでした。イエスの内の霊は不義、死、病氣、災害などを悲しまれるので、イエスは一人嘆き悲しむために立ちのかれました。

2. そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上がった。」(4:13-16)

- a. 興味深いことにイエスは故郷ナザレへは戻らず、カペナウムに移住されました。これによって、暗闇と死の陰があった所に偉大な光が来る、というイザヤ書の預言が成就しました。
- b. 水によるバプテスマ、聖霊によるバプテスマというすばらしい体験をされて霊的にも高揚していたイエスが次に導かれた所が悪魔と向き合う荒野、そして今度は暗闇と死で知られる場所、というのは注目すべきことだと思います。
- c. しかしこの2つの状況の結果は一貫していました。物理的状況は暗く、気味悪く、重苦しいものでしたが、イエスは人知を超える平安をもってその場に入られ、試練を乗り越えた時には恵みを受けるべき人たちすべてにイエスの光が照らされました。

3. この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(4:17)

- a. バプテスマのヨハネとイエスの説教がまったく同じであることに気が付かれたでしょうか。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」カペナウムに光をもたらすことができた手段の一つはイエスがみ教えを語られることでした。
- b. 私たちが内面的個人的に神の愛の光の中に生き、私たちの内面に神が働かれ、その一貫したメッセージが外面に表れた時、それが真の光が灯る時だと信じます。人が何かを語る時、その内容がすべて正しくても、それが強引だったり操作的だったりうわべだけだったり何かあやしい、ということがあります。それは彼らの内面と口から出る言葉に一貫性がないからです。
- c. 引き続きイエスの生涯を見ながら、イエスの説教を学んでいきますが、神と共に歩む時に基礎となるものは悔い改めと天の御国です。